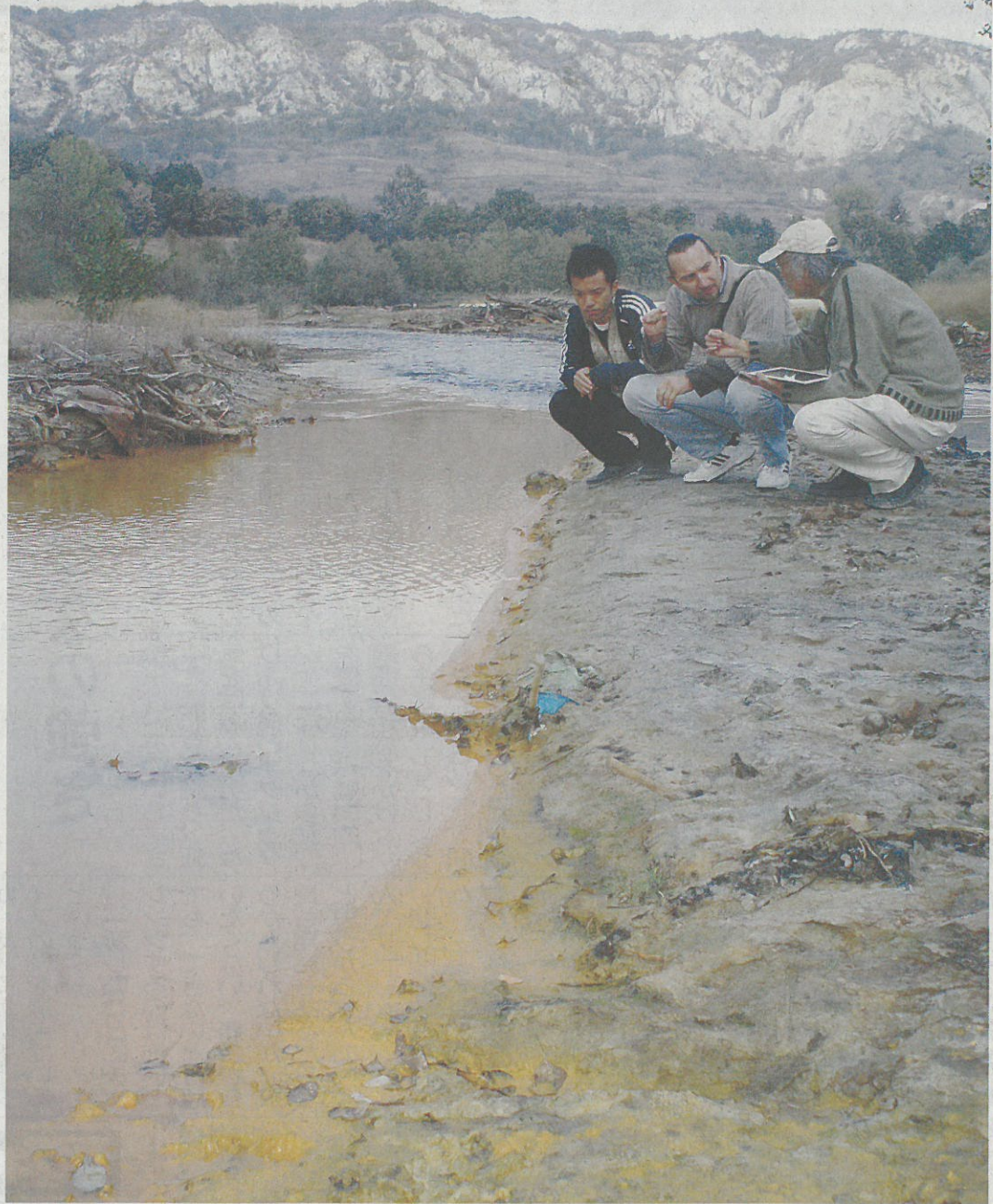


# 世界川物語

## ドナウ川(セルビア)



セルビア・ボル銅鉱山の近くの川。流れ込んだ汚水の影響で水も川辺の土も黄色く染まっていた。左から竹峰、ベスコスキー、中野の3人が川辺に腰を下ろし、今後の研究計画などを話し合い始めた

# 空爆の遺産広がる汚染

「川の恵みは市民になくてはならないもの。その川の水やここにすむ生き物に目に見えない汚染が広がっているかもしれない。でも、誰もそれを分かっているか?」化学が専門のベオグラード大准教授、ウラジミール・ベスコスキー(37)が、流れを見詰めた。民族対立に端を発したコンボ紛争で北大西洋条約機構(NATO)はユーゴスラビアを空爆、セルビアの工場や発電所、石油精製施設などは徹底的に破壊された。約3カ月続いた爆撃の後、ドナウには「有毒の遺産」と呼ばれる、目に見えない汚染が残された。発電所や工場からはポリ塩化ビフェニール(PCB)などの有害化学物質が大量に川に流れ込んだのだ。

ドイツに源を發し、黒海に注ぐ欧州第2の川ドナウ。かつてここを往來した貨物船は觀光クルーズ船に、川沿いの倉庫は現代的なカフェやレストランに姿を変えた。しかし、ドナウ川は今もセルビアの人々の暮らしの間近にある。

「川の恵みは市民になくてはならないものを埋めた。民族対立に端を発したコンボ紛争で北大西洋条約機構(NATO)はユーゴスラビアを空爆、セルビアの工場や発電所、石油精製施設などは徹底的に破壊された。約3カ月続いた爆撃の後、ドナウには「有毒の遺産」と呼ばれる、目に見えない汚染が残された。発電所や工場からはポリ塩化ビフェニール(PCB)などの有害化学物質が大量に川に流れ込んだのだ。」

空爆直後、国連は化学物質汚染を確認するため、調査チームを派遣した。調査の深刻さをゆえに「ホットスポット」と称された場所の多くはドナウ川に面していた。

高濃度PCBを含む変圧器などは撤去、処理された。しかし、工場廃水などに含まれる有害物質に紛争の遺産

## 日本人研究者 調査に着手



結婚記念日を祝い、ワインで乾杯する夫婦。市内には川を眺めながら食事を楽しめるレストランが数多くある(ベオグラード)

「研修で来日したセ」

「この川はもう死んでしまっている」。鉱山からの廃水で毒々しい黄色に濁った川と、生活排水などで汚れた真つ黒な水が流れる川とが出合う場所に立った中野が言う。黄色い汚泥は川岸にも積み重なり、水中には魚の姿はおろか、水草さえない。

「これだけ流れが速く水量も多いのに、水も泥も真つ黒だ。どれだけ汚染が激しいか分かるな」と畳み掛ける竹峰。ベスコスキーは「この川もやがてドナウに行き着く。川を汚し続けることはできないのだが、われわれには資金もないし、分析機器さえも十分じゃない」と嘆く。

汚染の実態が解明され、対策が進む時が来ることを夢見る日が続く。敬称略(文・井田徹治、写真・植田剛史)共同

### 取材後記

ポリ塩化ビフェニール(PCB)は19世紀に初めて人工的に合成された有機塩素化合物だ。絶縁性に優れ、燃えにくいなどの特性が注目され、トランスなどの電気機器の絶縁油や塗料、ノーカーボン紙の溶剤などとして多くの国で使われた。その後、発がん性などが確認され、環境中で分解されにくい上に生物の体内に蓄積し

やすいことから深刻な環境汚染や人体汚染が発覚。揮発したPCBが気流によって運ばれるなどして、汚染は地球規模で進んでいる。1968年にはPCBが植物油に誤って混入、西日本を中心に大きな健康被害をもたらした「カネミ油症事件」も起きた。日本ではPCBの生産と使用が72年に禁止されたが、機器の中に残ったPCBの処理が進まないこともあり、環境汚染は現在も続いている。

